

あきら

島田 叡

沖繩戦の渦中にいた、 知られざる男の姿が 今、明かされる

アジア太平洋戦争末期。すでに日本軍の敗色濃厚だった1945年1月31日、一人の男が沖縄の地を踏んだ。戦中最後の沖縄県知事・島田叡である。前年の10月10日、米軍の大空襲によって那覇は壊滅的な打撃を受け、行政は麻痺状態に陥っていた。そんな中、内務省は新たな沖縄県知事として大阪府の内政部長、島田叡に白羽の矢を立てた。辞令を受けた島田は、家族を大阪に残し、ひとり那覇の飛行場に降り立ったのである。

俺は死にとうないから
誰かが行って死んでくれ
とは、よう言わん

県民を守らねばならない
私は何としても
軍は県民も玉砕だ
などと言っているが、



知事着任と同時に、島田は大規模な疎開促進、食料不足解消のため、大量のコメを確保するなど、さまざまな施策を断行。米軍が沖縄本島に上陸した後は、壕(自然洞窟)を移動しながら行政を続けた。だが、戦況の悪化に伴い、大勢の県民が戦闘に巻き込まれ、日々命を落としていく。また、島田自身も理不尽極まりない軍部からの要求と、行政官としての住民第一主義という信念の板挟みになって苦渋の選択を迫られる。戦時下の教育により、捕虜になるよりも自決や玉砕こそが美德とされた時代、島田はしかしそれに反し、周りの人々に何としても「生きろ」と言い続けていた。その考え方はどのように育まれてきたのか？



島田 叡
1901~1945

島田 叡氏は、行政官として本当に尊敬すべき、本物の人物じゃないかと思えます。— 故・大田昌秀 元沖縄県知事
沖縄戦を生き延びた住民、軍や県の関係者、その遺族らへの取材を通じ、これまで多くを語られることのない島田叡という人物と、語り継ぐべき沖縄戦の全貌に迫ったこの長編ドキュメンタリーは、『米軍が最も恐れた男 その名は、カメジロー』2部作で沖縄戦後史に切り込んだ佐古忠彦監督が、あらためて沖縄の知られざる戦中史に迫った野心作だ。権力者への忖度、資料の改竄や隠蔽が常態化し、政治不信が蔓延する21世紀・令和の時代に生きる私たち日本人の眼に、後に「官僚の鑑」、「本当に民主的な人」と讃えられた島田叡という人物の生き方はどのように映るだろうか。



佐古忠彦監督作品

プロデューサー：藤井和史 刀根鉄太 撮影：福田安美 音声：町田英史 編集：後藤亮太 選曲・サウンドデザイン：御園雅也
音響効果：田久保貴昭 音楽：兼松崇 中村巴奈重 語り：山根基世 津嘉山正種 佐々木蔵之介
主題歌「生きる」小椋佳(アルバム「もういいかい」)(ユニバーサルミュージック)収録曲)
2021年/日本/日本語/カラー(一部モノクロ)ビスタ/5.1ch/118分/公式サイト: ikiro.arc-films.co.jp
製作 映画「生きる 島田叡」製作委員会 配給 アーク・フィルムズ ©2021 映画「生きる 島田叡」製作委員会

生きる 島田 叡
— 戦中最後の沖縄県知事

3月6日(土)より
全国に先駆けて先行公開!!

国際通り、てんぶす那覇から徒歩2分

桜坂劇場

098(860)9555 <https://sakura-zaka.com/>

特別鑑賞券
絶賛販売中!
1,200円(税込)

